

来日しているムスリムをめぐって多文化共生を考える —茨木モスクのムスリムのエジプト人を対象に—

Abdelrahim Elhadedy (大阪大学)

1. はじめに

年々、来日するムスリム(イスラム教徒)が増えている中、ムスリムたちはどのように工夫し、日本で暮らすことができているのだろうか。また日本で生活しながらどのように日本人と共生し、社会に貢献しているかといった多文化共生が大きな課題である(三木 2012)。

日本に来る際及び在留カードを発行する際には、本人の宗教の記載が求められていないため、日本に滞在しているムスリムの数は明確ではない。法務省の2015年のデータにより、インドネシア、バングラデシュ、エジプト、サウジアラビアなど、ムスリム人口が全人口の過半数を超えている国から来日している人口は81250人となっている。さらに、ムスリム人口が過半数を超えていない国から来日しているムスリムや日本人のムスリムを足すと、現在日本には約10万人以上のムスリムがいると考えられる。ハラールフード¹を出す店とモスクの増加がそれを反映している。

日本におけるモスクの開堂は1990年で分けることができる。1990年までは日本にはモスクが非常に少なく、増えるスピードも遅い。1990年までは4堂けであったが、1990年以降の26年間で増加し、現在78堂のモスクがある。

2. 先行研究

日本社会における滞日ムスリムの生活世界やムスリム・コミュニティに関する研究を主な課題とする店田ら(2006)は文化の違いやホストとの対人関係に関する悩みや心配事についての項目を選んだ回答者の割合を見てみると、日本人の考え方(18.8%)、日本の習慣(14.1%)、地域の間人間関係(16.8%)、職場の間人間関係(10.1%)と、他の心配ごとと比べて少ないものの、ホストとの対人関係や日本文化との差異に悩んでいる者がいることがうかがえる。しかし、中野ら(2015)は店田ら(2006)の調査結果についてこのように「これらは自由記述により尋ねられたものではなく、予め困難項目を設けたうえで尋ねられたものであるため、困難のバリエーションも乏しい。困難内容の詳細や下位分類を明らかにすることが、今後の研究課題の一つになろう」と述べている。本稿はインタビュー調査によりこのような困難のバリエーションを明確にする試みである。

3. 調査の背景と目的

大阪大学には多くのムスリム留学生や院生が在学している。彼らはOsaka Muslim Association(OMA)を設立し、大阪大学が与えた部屋で金曜日の礼拝を行うようになった。しかし、この部屋が非常に狭く、利用するにあたって、大学のルールを守らなければならない。そのため、ムスリムコミュニティは家族をつれて自由に礼拝したり、友達に会ったり、イスラム学について勉強したりすることができる場が必要となった。こうして、自由に利用できるモスクを立てる考えが生まれた。1990年代にはこのようなムスリムの留学生は関西地域にいるムスリムビジネスマンとムスリムの日本人と手を合わせて、大阪でモスクを立てるための土地を買うのに銀行口座を作った。この講座に寄付や募金を募ると、2006年3月31日に土地の契約を結ぶことがで

きた。そして、同年4月22日に茨木モスクが開堂された。茨木モスクは大阪府の茨木市にある。大阪モノレールの豊川駅から歩いて7分ぐらいである。

筆者は研究生であった2016年2月から3月にかけて茨木モスクに通う10人のエジプト人を対象に本調査を行った。調査の目的はこの10人のエジプト人がムスリムとして日本で生活しながら、どのような問題に直面しているのか、どのように工夫して日本で暮らすことができているかを明らかにすることである。

4. 研究方法

筆者がムスリムである背景もあり、どれぐらいムスリムたちは日本の社会と共生できているかを主なリサーチクエスチョンとして設定した。そこで、来日しているムスリムが①毎日の5回の礼拝はちゃんと時間と適切な場所で行われるか、②ハラールフードは手に入れやすいか、③日本人の友達ができているか、④子供にとって日本の学校はどうなっているか⑤日本での生活に満足しているか、この5点を研究課題とし、茨木モスクに通っているムスリムのエジプト人10人を対象に実態に即した半構造化インタビュー調査を行った。

調査は対面式で行った。場所は対象者の都合にあわせてため多様である。たとえば、茨木モスク・大学の礼拝所・家などである。対象者の同意を得て、インタビューの内容を録音した。調査はアラビア語で行った。対象者は全員アラビア語が母語であり、母語で話すとき自由に自分の考えを表すことができると考えられ、アラビア語で実行した。子供がいる対象者のみに「子供にとって日本の学校や幼稚園はどうですか」という質問を追加した。

インタビュー調査で得た情報を分析し、茨木モスクに通うエジプト人ムスリムの状況や課題を把握する。

5. 結果の分析

5.1. 礼拝の場所

対象者に「毎日5回の礼拝はどこでしていますか」と質問し、回答は以下のとおりだった。DとFは自分の部屋で礼拝している。しかし、これはムスリム全員の状況ではない。Dは「幸いなことに、私は研究所に自分の部屋があるから、そこで礼拝します。しかし、ほとんどのムスリムが自分の部屋がありません。そのムスリムたちは階段で礼拝するしかありません。2年前私は日本にいたとき、自分の部屋がなくて、階段で礼拝していました。」と述べている。また、研究室で礼拝するBは「大学は礼拝所を与えてくれましたが、私の研究室から遠いので、研究室で礼拝します。」と述べている。大学が与えた部屋で4人が礼拝している。大阪大学はそもそも吹田キャンパスで指定した部屋が狭かった。また、一つの部屋だったので、男性と女性をわけるため、さらに狭くなるがやむを得ずカーテンで分けた。しかし、ムスリム留学生が増加しているため、前の部屋より広く新しい二つの部屋を大学が用意した。男性と女性は別々の部屋に礼拝できるようになった。

また、外に出かけたり外食したりした場合、どこで礼拝するかという質問に対し、「公園が一番望ましい」という回答が多かった。Bは「外食するときには礼拝の時間がきたら、どこで礼拝するか困ります。そのために公園にでかけることにしています。公園だと誰にも迷惑をかけず、自由に礼拝できます。」と述べている。Cは「駅で礼拝することがありますが、公園が一番楽です。」と述べている。また、「礼拝をするなら公園がいい」とのべたDもこのように「もしあらゆるモールに礼拝の部屋を用意してくれば、いつでも礼拝できるから安心します。」と語っている。

5.2. ハラル食品の入手と確認

対象者に「どうやってハラル食品を手に入れますか。また、買い物をする時にどうやって豚肉とアルコールが入っていないことを確認していますか」と質問し、回答は次の通りであった。

10人は茨木モスクと吹田キャンパスの礼拝部屋でハラル食品を入手する。時折スーパーではいくつかのハラル食品が売られている。また、Eは「大学の食堂でハラルの食べ物が提供されている」と述べている。

さらに、ムスリムにとってその食品がハラルかどうかが大事な課題である。そのため「どうやってこの食品がハラルかどうかを確認しますか」という質問に対しては回答が様々である。Hは「私が来る前に来日した友達に聞くか、日本語がわかる人に聞くかにしています。」と述べた。しかし、いつも新しい食品が出てくるので、これに対してJは「(中略)また、先輩が教えてくれなかった新しい食品であれば、この食品の写真をとって、ムスリムのFacebookグループにアップロードして、これがハラルかどうかをききます。そうしたら、この商品に関する情報を持つムスリムまたは日本語がわかるムスリムが教えてくれます。」と語っている。

上記の例から、日本語がわからない人にとってハラル食品かどうかの確認が非常に難しいことがわかる。しかしながら、驚いたことに日本語がわかる人にでも簡単ではない。Aは「日本語がわかるから、商品の原材料名を読んで確認します。しかし、困るのは材料には様々な書き方があります。たとえば、豚には〔豚〕〔ポーク〕の書き方があり、アルコールにも〔アルコール〕〔酒〕〔洋酒〕〔清酒〕があります。」と述べている。

外に出かけたり外食したりした場合、どこで礼拝するかという質問に対し、「公園が一番望ましい」という回答が多かった。Bは「外食するときには礼拝の時間がきたら、どこで礼拝するか困ります。そのために公園にでかけることにしています。公園だと誰にも迷惑をかけず、自由に礼拝できます。」と述べている。Cは「駅で礼拝することがありますが、公園が一番楽です。」と述べている。また、「礼拝をするなら公園がいい」とのべたDもこのように「もしあらゆるモールに礼拝の部屋を用意してくれば、いつでも礼拝できるから安心します。」と語っている。

5.3. 日本人の友達

対象者に「日本人の友達ができましたか。一緒に花見とかお寿司の店へ行きますか」と質問した。

日本人の友達ができた自信をもって回答したのはAとBとFである。この3人以外は友達というより職場の同僚の関係である。つまり、研究や仕事の会議などの付き合いがあるのに対し、花見や寿司を食べに行くことはほとんどない。たとえば、Cは「研究所のメンバーの旅行と一緒に出ます。研究所の旅行じゃなければ、一緒に出かけません。」と語っている。

5.4. 子供の教育

日本の学校または幼稚園に通っている子供を持つ対象者には「教育のため子供は日本の学校に行きますが、日本の学校はどうですか」という質問も実施した。

学校または保育園へ通っている子供をもつのはD・E・G・H・Iの5人である。対象者全員が市役所の保育センターが通訳者を雇ってくれたと話している。Hは「学校で子供は言葉がわからないので、子供に通訳者を雇ってくれます。市役所の教育センターがこの役割を果たしています。」と語っている。親は子供に日本の学校へ行かせたことについて、「私は子供たちを日本の学校に通わせたかった、日本の文化を子供たちに身につけさせたいからです。」と話している。

5.5. ムスリムとしての日本での生活の満足感

対象者に「日本での生活に満足していますか。なぜですか」と聞いたところ、「日本での生活に満足している」という回答がほとんどであった。たとえば、Fは「日本での生活に満足しています。日本人は異文化や宗教の自由を尊重していますから。」と述べた。Jも「日本での生活に満足しています。日本は安全だし、サービスもいいです。市役所では事務の係員たちは協力してくれます。」と語った。しかし、現在のレベルより日本に期待していることもあるようだ。たとえば、Aは「日本での生活に満足しています。大きいモールで礼拝する場所を用意してくれたらいいと思います。レストランなどではハラールの食べ物があれば、それを書いてほしいです。」と述べた。またDは「日本での生活に満足しています。少しだけの改善が必要です。そうすればムスリムとして日本での生活は他の多くの国よりずっと良くなると思います。」と指摘した。

6. 考察

以上の調査分析を踏まえて、以下のことが考えられる。

- (ア) 在学しているムスリムが日本の社会でスムーズに生活できるように、大学はムスリムのために礼拝の部屋を与えたり食堂ではハラール料理を用意したりしている。
- (イ) 日本語がわからないために、情報の収集が難しく悩むことが多いが、ソーシャルメディアを使用し、情報交換をすることによりこの問題を解決している。
- (ウ) 子供の教育は心配だが、行政から派遣された母語支援者による取り出し支援や入り込み支援が行われている。
- (エ) ムスリムは、ハラールではない材料が使われていること、及び礼拝所が用意されていないことから外食を控えていることが明らかになった。礼拝するスペースを求めて公園へ出かけることが一番の打開策になっているが、これは理想の形ではない。
- (オ) 日本での生活に満足しているが、先進国としての日本に対する期待とは合わない。

このような動きを見ると、先進国としての日本に対するムスリムの期待は大きく、日本はムスリムと共生できる社会に向かおうとしていることがいえる。しかし、これはあくまで大学や企業である。また、2020年の東京オリンピックが近づいているので、日本人とムスリムとの共生のあり方が重要になってくると思われる。

7. 本研究の限界と今後の課題

本研究はエジプト人ムスリムを対象にした。それは、筆者はアラビア語が母語であり、対象者とコミュニケーションがとりやすく、また対象者が自分の母語で話すことで、言葉に不自由を感じず、リラックスして遠慮なく話すことができると考えたためである。研究でわかったことを活かし、他の国籍を持ったムスリムを対象に同様の調査を行うことが次の課題と考えられる。

8. 謝辞

本研究のインタビューに協力して下さった皆さんに感謝致します。

注

¹ イスラム法上で食べてはいけない材料が入っていない食品のことをいう。

【参考文献】

- 三木英（2012）『宗教研究』85巻4輯 宗教的ニューカマーと地域社会 ―外来宗教は
ホスト社会といかなる関係を構築するのか―
- 中野祥子・奥西有理・田中共子，2015「在日ムスリム留学生の異文化適応に関する研究
の動向」岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要第39号.
- 岸田由美（2011）ムスリム留学生の宗教的ニーズへの対応：現状と課題 留学生交流・
指導研究,13, 35-43.
- 店田廣文（2006）「在日ムスリム調査―関東大都市圏調査第一次報告書―」、早稲田大学
人間科学学術院、アジア社会論研究室.
- 茨木モスクのホームページ：<http://osakamosque.org/index.htm> 2月15日、17：15
- 法務省のホームページ：<http://www.moj.go.jp/> 2月20日、18：50